

サイクル導入の有効性を説くのが本書である。女性の活躍、働き方改革、採用、離職、中間管理職の役割、高齢化の6つのテーマについて、データ

日本人は何か大きな災厄があると「第二の敗戦」という表現をしばしば用いる。太平洋戦争の敗戦は、それほど日本人の記憶に深く刻まれている。敗戦は自国への不信感や国民としての自己不信の原点となっているといえよう。こうした傾向は、敗戦とは実質的に無関係な、戦争の責任をとりようもない若者世代に重くのしかかる。

本書は、アメリカの同時多発テロや北朝鮮の核武装、日本の再軍備・改憲論争等をふまえて、日本人は「戦後の分岐点」に直面していると述べる。しかし、さまざま歴史論争はむしろ国内の亀裂を深め、いよいよ膠着状態にある。日本人は、あの敗戦を忘却したわけではない、その汚点と不名誉をいかに克服してきたか——著者は、比較文化論の方法を用いて鋭く迫る。家族、学校、学校教育に

日本の長い戦後

橋本 明子著



原題=THE LONG DEFEAT
(山岡由美訳、みすず書房
・3600円)

はしもと・あきこ 52年
東京都生まれ。米国在住の
社会学者。

〔評〕 山梨学院大学教授
小菅 信子

着眼し、とくに1990年代から2010年代を対象として、敗戦の記憶としての敗戦、さらには「敗戦の文化」について、わかりやすく論じている。

多神教的な日本の「敗戦の文化」は、キリスト教・ユダヤ教的な正戦論になじむことはなかった。著者は、日本人の敗戦の記憶を3つ

の類型に整理する。
第一に、「美しい国の記憶」。敗戦を幸運としつつ、勇敢に戦い散つていった英雄たちは、無駄死にではなかたとする記憶のありかた。第二に、「悲劇の国の記憶」。日本人被害者によりそい、自身を重ねあわせる。メディアや家族、学校という日常に見いだせる、民衆の祈り、追悼の文化。最後に、

「やましい国の記憶」。日本の帝国主義的支配や侵略、榨取に焦点を合わせる。著者は同時にナチに抵抗するレジスタンスを正史とするフランスや、ベトナム戦争とアメリカなどの比較事例をぶんだんに提示する。日本の「敗戦の文化」は、第一次世界大戦後のオスマン帝国に重なるところがあると、ユニーグな議論を開拓する。

オックスフォード大学出版局から原著が出版されている本書は、翻訳も秀逸だ。これまでなかつたオリジナルなまなざしに映しだされる「敗戦の文化」に読者は魅惑されるだろう。

日本の

大湾秀雄
HR Tech
HR Analytics
People Analytics
 Talent Management
 Evidence-based HR
 Data-Driven HR

(日本経済新報
2300円)
おおわん・
生まれ。東京
門は人事経
学および労働

育」の具体策のヒントもあるよう思われる。

〔評〕 日本総合研究所理事
山田 久

読
書

世界を分断する「壁」

忘却の引